家康

徳川家康 7

無相門の巻
籠虎の巻

山岡荘

徳川家康

無相門の巻・龍虎の巻

山岡荘八

講談社

KODANSHA

徳川家康　第七巻　無相門の巻
龍虎の巻　昭和三十九年十一月十
五日第五刷発行　著者　山岡荘八
発行者　野間省一　印刷所　凸版
印刷株式会社　製本所　大製株式
会社　発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽町三ノ一九　振
替　東京三九三〇　電話　東京
（九四二）一一一一（大代表）
©山岡荘八　一九六三
定価　六百二十円

徳川家康 7

無相門の巻
龍虎の巻

目次

無相門の巻

次に吹く風　七

硬骨軟骨　二二

三河の使者　三八

残月　五四

防風林　七二

出陣　九三

犬山思案　一〇八

龍虎の駈引　一二七
筑前旋風　一三八
長久手　一五九
勝入戦法　一七七
乱戦　一九六
鹿と瓢　二一四
小慾大慾　二二五
和平の供物　二三五
茶道三略　二五一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

龍虎の巻

誤解の海　二六七
初恋　二八五
霜の心　三〇一
政略　三一二
荒波の城　三二七
造花の人生　三四九
抵抗　三六四
大患　三七五

付　録（参考地図及び諸家系譜）

装幀　稲垣行一郎
挿画　木下二介
箱裂地　麻地草花人家文様茶屋染
提供　山口勉
表紙金版　徳川家康直筆署名

徳川家康

7

無相門の巻
龍虎の巻

無相門の巻

次に吹く風

一

茶屋四郎次郎は、じりじりと照りつける炎天下を矢矧(やはぎ)の大橋へ急いでいた。

うわべは徳川家の呉服調達の御用商人で、その実は京方面の諜報は一手に引受けていると言ってよい茶屋であった。

すっかり商人ぶりは板について、その眼も以前の鋭さから、いかにも裕福な長者らしい風貌に変っている。

手代と見せた護衛二人を連れて、橋の中央にかかると、彼は足をとめて流れを見やり、それから行手に深緑をかざした岡崎城を仰いだ。

「どうじゃ、ここは、別天地の感ではないか」

「はい。戦のあるとないとは、吹く風の匂いが違いまするな」

「しかし、こんどはどうなるかのう」

「どうなるかとおっしゃると、こっちも火の粉がふりかかると言われますので」

「お館(やかた)さまは、さほどではないが……何分、三河には頑固者が揃うて居るでのう」

茶屋四郎次郎はそう言うと、陽かげのない橋の上でわざわざ草鞋(わらじ)の紐を結び直した。

「すると、北陸のことが片附きますれば、筑前どのの手は、この方面に伸びるとおっしゃりまするか」

「そうなろうのう、もはや、岐阜の運命も決ったゆえ、天下の平定となれば、徳川家だけをそのままにはしておけまいでなあ」

「そうなったら、なるほど一大事でござりまするなあ」

「一大事などという段ではない。お館さまの上に生涯でいちばん大きなさわりになろう。さ、急ごうか」

「はい。この岡崎の城にはお寄りなされませぬので」

「それがのう」

歩き出して振返って、
「寄らずにそのまま浜松へ行く気であったが気が変った」
「気が変ったとはお寄りなされまするので」
「寄らずばなるまい。いま、この城の城代は石川伯耆守数正どの、石川どのと、密談せずに通りすぎてはならぬ気がする」
手代はそれで黙ったが、茶屋はまたひとり言のように、
「とにかく、北の庄の城はおち、北陸の備えは一新した。ここでお館さまに、戦勝祝いの使者を出して頂かねば、筑前どのとの後のもつれが増そうでな……」
四郎次郎は、それ等のことを家康に報告、献策のため浜松に赴く途中であったが、道々考えてみると、三河武士の中に、秀吉と対談して、面目も傷つけず、感情も害さぬような外交手腕のある者が思い当らなかった。
武骨一辺で、秀吉を成上り者と軽んじたのでは、それこそ後が大変だったし、逆に秀吉にまるめられる可能性も充分あった。
秀吉はその点摩訶不思議な力を持った大天才なのだ。
相手がひどく素朴だと見てとったら、恐らくその肩を叩いて一度で自分の味方にしてしまうに違いない。
(これはやはり石川どのでなければ勤まるまいが、さておきき入れなさるかどうか……)
茶屋はまっすぐ城へ向いながら、しきりにそれを考えていた。

二

岡崎城も以前の構えから見ると、すっかり変った。家康自身の功業と歩速を合せて、城廓も櫓も立派になったし、それを囲む樹木の繁りも加わって、どっしりとした重さを加えている。
石垣も濠も、三代続いた苦闘と繁栄の秘密を空に囁きかけている。
と言って、ついこの間落ちた北の庄の城に比べては櫓も低く、敷地も狭いのだが……
「城ではない……そこに住まう人の心だ」
茶屋四郎次郎は、額の汗を拭きながら、勝手知った連尺木戸へすすんでいって、
「京の呉服御用を勤めまする茶屋四郎次郎でござりまするが、ご城代さまに……」
と、いんぎんに申入れた。
「なに、京の呉服商だと」
門番は四郎次郎の顔を知らなかったと見えて、
「いったい何の用なのだ。御城代さまは忙しいぞ」
「はい、浜松のお館さまのもとへ参向致します途中、ちょ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

っとご挨拶にまかり出ましたので」
「取次げば、会うと思うのだなご城代が」
「はい。たぶんお許し下さると存じまする」
「よし、無駄でないと分れば取次ぐ」
茶屋は手代を振返って苦笑した。
万事がこの調子なのである。素朴で失礼で、そしてどこかに愛嬌もあるのだが、物言う時には噛みつきそうな語勢である。
三河気質……とでも言おうか。これが足軽小者にまで滲透しているので、戦となれば素晴しく強いのだが、さて、平時のかけ引き、社交となるとちょっと困りものであった。
以前、信長のもとへ使した、酒井忠次と大久保忠世の両人が、ついに家康の嫡子信康を窮地に陥れた前例もある。
ところが、こんどは信長よりも遙かにむずかしい相手の秀吉と、とにかく接触しなければならないことになったのだ……
茶屋四郎次郎は、木戸口に立たされたまま暫く待った。門のすぐ中には供待ちも対面所もあるのだから、そこで待たせて呉れたら助かるのだが、そんな融通はききそうもない。
「茶屋どの、通らっしゃい」
「はい。ご城代さまはお会い下さりまするか」
「商人」
「はい」
「その方は、ご城代とは古いつきあいか」
「はい。もうかなり古くから」
「そうらしい。丁寧に案内せよと仰せられた。来いッ」
四郎次郎はまた苦笑して、
「では、二人の手代は、この供待ちで」
「なに、そうか。まだ二人居たか。よし、神妙に控えて居れ。その方たちのことは訊くのを忘れた」
「かしこまりましてござりまする」
手代を供待ちに待たせて本丸へ中門をくぐってゆくと、大玄関へ、若侍二人が出て来て迎えて呉れた。
「茶屋どのか、こっちへ通らっしゃい」
これも、門番と同じ口調で、案内された茶屋が商人姿なのでムッとしている様子だった。
たずねる石川数正は、本丸の小書院で、しきりに祐筆と何か話しているところだったが、四郎次郎の姿を見ると、
「おおこれは松本氏、さ、ずっとこれへ」
言いながら、祐筆と若侍に退るように眼顔で知らせた。

三

茶屋四郎次郎は祐筆と若侍が退出してゆくまで敷居ぎわで神妙に頭を下げていた。

家康よりも三ツ年長の石川数正は、この時すでに四十五歳になっている。

十歳で家康の傍小姓にあげられ、長い間ともに人質暮しを続けて来て、家康の長子信康を三河へ迎え取る時にはわざわざ同じ馬に乗せて引取って来た功臣だった。

それだけに三河武士の中では圭角がとれ、風貌にも物腰にも円熟した重厚さがにじみ出ている。

「松本氏、北国のことは、到頭きまりがついたようでござるな」

「はい。万事が筑前どのの、方寸の通りになってゆきました」

「さ、ずっとこれへ。誰も聞いて居る者はない。こなたの考えを聞かせて下され。北国は誰に任されましたかの、筑前どのは……」

茶屋四郎次郎は、ゆっくりと数正の前にすすんで、もう一度噴き出てくる汗を拭った。

「実は、お館さまに、とりあえずと思うて、罷り出ましたが、お館さまには浜松にご在城でござりましょうなあ」

「されば、もはや甲斐からお戻りなされている筈でござる。あの国の国制を定められてな。しかし、またこの秋には甲斐から駿河と、ご自分で廻られるおつもりらしいが」

「ご熱心なことで」

「まことに、われ等もつくづく感嘆致して居ります。筑前どのが城攻めなされている間に、こっちはすっかり地固めせねばと仰せられてなあ」

「その事でござりまする。地固めについては、この茶屋など、何の不安も覚えませぬが、それから先の事がちと……」

「と、言われると、筑前どのに、何か変った気配でもあると言わっしゃるか」

「いいえ、北国のことはこんど、越前と加賀の内、能美、江沼の二郡をさいて丹羽長秀に下され、本領の若狭と共に治めさせ、加賀のうち石川、河北の二郡は前田利家に能登と共に与えられ……」

「待って下され。越前は丹羽長秀に」

「はい。加賀、能登は凡そ前田父子でござりまする。父の利家は能登の七尾から金沢へ移って築城致しましょう。又利長は府中より加賀の松任へ、七尾には前田安勝、長連龍などを置き、佐々成政は越中の富山へおいて上杉家の交渉に当らせて居りまする」

「ふーん。ひどく前田領は多くなった。それで佐久間玄蕃はどうなりましたな。戦の最中に行衛知れずになったとか聞いたが……」
「それが、途中で捕まりました。玄蕃も権六郎もな……はじめはしきりに降伏をすすめたらしいが、玄蕃は頑強にこれを突っぱね、わざわざ京へ連行されて引廻しの上、首をはねられました」
「ふーん。それでは柴田の一類は根絶したか」
「みなみな意地にこだわって、少しく思慮が足らなんだ……と、より申しようがござりませぬ」
「して、このあとは、どう動くとご覧なさる」
「これで信孝さまも終り……この次は、大坂築城ではあるまいかと存じまする。天下は、この秀吉が握ったぞと、故右府さまの安土の築城、あれになぞらえて、天下の諸侯に賦課を命ずる……となりまするとご当家にもかかわり無いことではござりませぬぞ」
四郎次郎はそう言ってじっと数正を見詰めてゆく……

四

数正はゆっくりと頷いた。
戦が済めば、徳川家からもいずれ戦勝祝いの使者は出さなければなるまい。
（その使者を誰にするか？）
それは茶屋だけではなく、数正にとっても関心のあることであった。
「ご城代さま」茶屋四郎次郎は、ちょっとあたりを見回すようにして、
「こんどのお使い、誰が宜しゅうございましょうかな。筑前どののもとへ遣わされるお方は？」
「使いは誰でもよい筈じゃが……」
と、数正は相手の視線をそらすようにして、
「そのあとでうるさい事になろうも知れぬの」
「そのあとで……？」
「さよう、筑前どのは、必ず何か口実を設けてお館に、自分のもとまで伺候するよう計らえと、その使者に仰せられようでな」
「そのことでござりまする」
と、こんどは茶屋が身をのり出した。彼の案じているのも、それから先のことであった。
「万一、ご使者が、それを止むないことに考えて、お請けして戻られたらどうなりましょうかご城代」
数正は、ゆるく首を左右に振った。
「お館はとにかく、老臣どもが承知すまい。使者は戻って切腹ものじゃな」

「切腹と分っては行く方がございますまい」
「まず無いであろうの」
「とゆうて、わざわざ筑前どのの許迄お祝いに赴き、向うが来いと言われるのに、その儀は……と、お断りも出来かねましょうかと」
「それは出来る」
と、数正は、陽焼けした頬に皮肉な笑みをうかべて、
「それは出来るが、にべもなく断って来る程なら、相手の感情を傷う点で、始めからお祝いなどに行かぬがよかったという結果になろうの」
「そうなったのでは話になりませぬが……」
茶屋も思わず眉を寄せて苦笑した。
「相手はそれで、捨置くお方ではございませぬので……」
「されば、その点でのう……」
「ご城代さま！」
「妙案があるかな松本氏に」
「いいえ、妙案などのあろう筈はございませぬ。が、これは、お祝いの使者も出さずに済むことではないように考えまするので……」
「わしもそれは、同じことじゃ。が、さて、誰が使者に行くかとなると……」
「この茶屋は、なみの者では済まぬ。お館さまに若し、誰がよかろうかと訊ねられた時には……」
そこまで言うと数正はギロリと鋭く四郎次郎を見返して、
「何者の名を挙げてお答えなさる気じゃ」
「はい……」ちょっと息をつめて右手を出して指をくり、
「井伊どの、榊原どのでは、まだ若すぎて、筑前どのがご不満でございましょうし」
「それで……」
「本多どのでは、ちとはげしすぎまするし……酒井、大久保さまでは、この前の信康さまのこともあるゆえ、お引請けはなされますまいし」
「それで……」
「私は、やはり、あなた様と、本多作左どのの名より他に、挙げるお方がございませぬ」
四郎次郎はそこで又、相手の肚を見透そうとしてじっと息をこらしていった。

五

石川数正は、黙って庭先を見やったまま、暫く答えようとしなかった。
その様子が、ひどく手応えのない感じなので、茶屋四郎次郎は言葉をつづけた。

「この事は若い方々には分りますまい。いや、老臣衆の中にも、筑前どのの気性を誤りなく読みとって居られる人は稀れかと存じます。筑前どのは、何時のころからか、ご自分を天下平定のために生れ来った太陽のお子と確信されてござりまする。この確信はおそろしい……筑前どのの命ずるままにならぬ者は、平定のための敵として、必ずこれを見遁しませぬ」

「……」

「この茶屋は、こんどの柴田攻めで、その事をまざまざと見せつけられました。柴田どのの意地の強さもさることながら、筑前どのもまた、一歩も譲らぬ異常な強硬さでござりました。いや、それだけならば敢て恐れるに足りませぬ。が、その上に、故右府さまに優るとも劣らぬ智略を持たれ、しかも摩訶不思議な人心収攬の術を心得て居りまする。堺から京、大坂の商人は言わずもがな、筑前どのに肩をたたかれて、味方せなんだ者は殆んどない……信孝さまの家臣も、柴田勝豊が家臣も……」

石川数正は、眼をそらしたまま小さく、しかし何度も頷いた。

茶屋の言おうとすることが、彼には分りすぎる程分っていた。

秀吉の人物そのものが、稀有の英才であるばかりでなく、その奉じている「天下平定」の大志がそのまま神仏の意志に叶っている。神仏自身は口を利かない。しかし、万民に平和を渇仰させていて、それが大きく秀吉を背後から支えている。

その点では家康も、秀吉によく似た理想をもっていた。ただ家康の場合は、少しでも現実の世界に平和を押しひろげようというのであり、秀吉の場合は、自分こそ天下平定のために選ばれて出て来た者と確信して動いている。その点にわずかながら相違があり、そのわずかな相違がまた大きな衝突の危険をはらんでいるのだ……と数正は思っていた。

「それにしても、松本氏の人選はおもしろい」

暫くして、数正はホッと吐息して茶屋を見返した。

「わしと、あの頑固一徹な作左どのに白羽の矢を立てられるとはのう」

「恐れ入りました」

四郎次郎は、笑いながら頭を下げて、

「私には、お二人さまは、まことによく似たお方と見えまするので」

「ほう、近ごろ老耄したと言われるわしと、老いていよいよ壮んな頑固ぶりの作左どのとが似ているとは妙なことを言われるぞ」

「はい、外に現われた形ではござりませぬ。内にかくされた赤心でござりまする」
「ふーん」
「恐れながら、この茶屋は、三河武士の精髄は、お二人の心奥に凝ってござるとお見受け申して居りまするので」
「ハハ……」
数正は豊かな表情で笑っていった。
「松本氏が、都の水を飲まれて、仲々口巧者になられたぞ。何のわれ等ごときに……」
「いいえ、筑前どのに屈せぬだけのご性根、はばかりながらお二方に……と、存ずればこそ、かく……」
数正はもう又わきを向いて、ボーッと庭を見やっていた。

六

「ご城代さま、都の水を飲んで口巧者になったとは心外なお言葉でござりまする」
茶屋はまた一膝すすめて、
「私は、今にして両雄並び立たずの古語を思わずに居れませぬ。筑前どのの力とご気性、この二つをよくよく究めてかからぬと、徳川家にとって、これは、三方ケ原以来の大難となるやも計られませぬ」
「と言われると、筑前どのの方から、合戦を挑まれると言わっしゃるのじゃな」
数正はいぜん視線をそらしたままで言った。
「たとえ筑前どのが合戦を挑まれても、お館さまは応じられまい」
「いいえ、合戦を挑むかわりに、臣礼を執れと強いて参るに違いございませぬ。今ではもはや、丹羽長秀どのも、細川藤孝どのも、みな筑前どのの家臣にござりまする」
「すると、お身の案ずるのは、お館さまが、筑前どのの家来にはなるまいと言われるのか」
「御意にござりまする。お館さまはとにかく、家老衆が承知すまい。それゆえ、ここで、尋常ならぬ用意の布石が必要だと申上げて居りますので」
「ハハ……」
数正はまた笑った。
「よう分りました。だがお案じなさるな。お館はそのようなお方ではない。わしも、お身の言葉は肝にきざんで置こう。又、お館の命があれば使いもしよう。それゆえ、今宵はゆっくりここで休んで一刻も早う浜松へ赴かれるがよい」
茶屋四郎次郎は、まだ、何か言い足りない気がして不服だったが、これ以上の言葉ははばかられた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com